

# 介護支援専門員による「気づきの事例検討会」活用と評価 の質的分析

Qualitative analysis of care managers evaluation of effect of "Kizuki no jirei kentōkai  
(peer group supervision)"

安達真理子

Mariko Adachi

一般社団法人兵庫県介護支援専門員協会気づきの事例検討会推進運営委員会研究部会委員

Hyogo care manager (a general corporate judicial person) association ,program and governing board  
research section

Key words:介護支援専門員、内省的学習、支援者支援

## 目的

介護支援専門員つまり援助職者が、クライアントに量・質ともに可能な最善なサービスを提供できるようになるために、知識・経験の豊かな人から受けるトレーニング「スーパービジョン」が必要と言われ、また事例検討会の効果も先行研究(岩間、2005)で実践力向上のために必要と指摘されている。兵庫県下では、スーパービジョンの要素を取り入れた「気づきの事例検討会」を先行研究(渡部、2007)に基づき広く活用している。介護支援専門員が「気づきの事例検討会」を活用することの評価を質的分析することとした。

## 方法

対象者:「気づきの事例検討会」を実施している兵庫県下のT市(人口22万人)、S市(人口4万人)の介護支援専門員で「気づきの事例検討会」の経験年数が3年以上4名と1~2年未満の4名の8名

調査方法:個別インタビュー調査「半構造化面接」インタビューガイドを用いて行くとともに、事例記録を記入してもらいその初回面接逐語録を分析対象とした。

分析方法:①個別インタビュー調査分析では、録音記録を文章化し、KJ法(川喜田、1967)によって、手順に沿い研究協力者4名(SW、主任CMの10年以上の経験者・気づきの事例検討会推進運営委員)で行った。

②初回面接逐語録分析では、逐語録の内容をカテゴリー化した。サブカテゴリーについては、渡部が実践家のトレーニングのために提案した(2007)会話の各々の意味を抽出するライン分析を参考にし、「発言の意図や明らかになったこと」として行った。

## 結果と考察

個別インタビュー調査では、2年未満の経験者では、参加への抵抗感があったが、基本を学ぶ大切さを感じ、「気づきの事例検討会」が自己理解のチャンスと捉え、自身の変化や他者への対応の変化が現れていることに気づくことができたとわかる。一方3年以上経験者では、他者

との関わりの変化を実感し、自己が仲間と共に成長していることや理論と実践の結びつきを実感している。今後の自己の方向として支援者支援や後輩を育成することや介護支援専門員としてスーパービジョンのできる対人援助者になることを目指しているなど経験年数での違いがあったと言える。なおT市とS市でのインタビュー調査において経験年数での市別の違いは現れていない。

次に初回面接逐語録分析では、2年未満の経験者は、面接相手の感情に丁寧に対応することの難しさが現れており、今後の見通しへのアセスメント面接に繋がりにくいやり取りであったと言える。3年以上経験者では、面接相手へのアセスメントから家族へのアセスメントを行い、今後の見通しや関わりに繋がる初回面接が行われていたことがわかる。

2つの分析から、2年未満の経験から3年以上の経験者になると自身の振り返りから周りとの関係等へ視野を広げ、仲間と共に成長のプロセスが見えてくると言える。参加経験を重ねることで内面の洞察から徐々に視野の広がりを見せ、周囲との関係性を築き、力としていくという支援者支援に繋がっていると推測される。「気づきの事例検討会」の目的は、クライアントにより良い支援ができるように、どのような理由で困難になっているかを明らかにしていくことである。対人援助者が、価値・倫理をベースに知識・技術が取得できるツールとして今後も「気づきの事例検討会」が介護支援専門員のスキルアップに繋がるものとして地域で実践していきたいと考える。

## 参考文献

岩間伸之(2005)『援助を深める事例研究の方法—対人援助のためのケースカンファレンス(第2版)』ミネルヴァ書房

渡部律子(2007)『基礎から学ぶ気づきの事例検討会—スーパーバイザーがいなくても実践力は高められる—』中央法規出版